此等の言葉を云ひ放つと共にキリーラ・ペッローウィッチは出て行き自分の後に扉を閉めた。

哀れな娘は、自分を待受けてゐる凡ての事を想像し乍ら、長い間泣いてゐた。然し、嵐の如き打明（インターヴュー）は彼女の心を輕くした、そこで、彼女は、一層心を靜めて自分の運命と云ふものに關して判斷し、又彼女が如何に爲さなければならないかと云ふ事に就いて辨へる事が出來たのであつた。彼女に取つて主要な事柄は――厭な婚姻から遁れる事であつた。盜賊の妻たるの運命は彼女に當てがはれてある運命と比較して彼女に取つては天國の如くに思はれた。彼女はゾブロフスキーが殘して行つた指環を凝視してゐた。彼女は、彼と只二人で會見し、今一度、決定的な瞬間の前に、長く相談する事に燃ゆるばかりの欲望を感じた。豫感は、その夜に於て彼女が庭園の中の亭の附近でゾブロフスキーを見

つける事を彼女に語つた。彼女は黄昏れ始めるや否や其の處で彼を待受けに行かうと決心したのである。黄昏が來た。マーシャは用意をした。所が部室の扉には錠がかゝつてゐたのであつた。小間使は、扉の外から彼女に、キリーラ・ペッローウィッチが彼女を出すなと命令したのだと答へた。彼女は幽閉されてゐた。深く惱されてゐる彼女は窓の下に坐し、夜の深更に至るも衣を解かず、身動もせず暗黑の空を仰ぎ眺めて坐つてゐた。夜の明方となつて彼女は微睡みかけた。然し微かな彼女の眠は悲しい幻に擾亂されてゐた、そして旭日の光は彼女を醒して了つた。

十七

彼女はすつかり目を覺した――そこで第一番の考として彼女の頭を占領して

了つたのが自分の位置の有ゆる恐怖であつた。彼女は呼鈴を鳴らした、と、下婢が這入つて來て、彼女の質問に對し、キリーラ・ペツローウィッチは昨夜某所に行つて遲く歸宅したと云ふ事と、彼が、彼女をその部室から出さないで置き、誰も彼女と話をしないやうに見張をするやうにとの嚴命を與へたと云ふ事と、さうはあつたものゝ、祭司に、怎んな口實の下にも村から離れてはならないと命令されてあつた他には、結婚に對しては何等の特別な準備は見えないと云ふ事とを答へたのであつた。此等の事を告げた後、下婢はマリヤ・キリーロヴナを殘置き、再び扉を閉めた。

彼女の語は若い女囚徒を殘忍な心持にさした。彼女の頭は沸返り、血潮は波を打つた。彼女は一切をヅブロフスキ!に知らせようと決心して、契約の樫の洞へ指環を送る手段を見出さうとし始めた。此の時折しも、小さな石が彼女の窓

に當り、硝子がヂン〳〵と鳴つた。そこで、マリヤ・キリーロヴナが外を眺めると、彼女に手眞似をしてゐる所の小さいサーシャが目に止つた。彼女は彼の愛着を知つてゐた、で、彼を見て喜んだのであつた。彼女は窓を開いた。

『今日は、サーシャ。何うしてお前さんは私を呼んでるの?』

『僕ね、姉さん、貴姉に何か用事はないかと思つて、貴姉に訊きに來たのです。お父つちやんはね、憤つてから、貴姉の云ふ事を聞いてはいけないつて、家中みんなに止めちやつたのです。けれど、貴姉に何が入用か僕にする事を吩咐けて頂戴、そしたら僕貴姉の爲に何でもみんなして上げます』

『有難う、可愛いサーシエンカ。ねえ、お前さん、あの亭の所の洞のある古い樫の木を知つてゐるでせう?』

『知つてゐます、姉さん』

『ではね、もしお前さんが私を愛してゐるのでしたら、大急で彼處へ走つていつてね、それから、ほれ、此の指環をあの洞の中に入れて置いてお呉れ、そしてね、誰もお前さんを見ないやうによく見るんですよ』

斯う云ふと共に彼女は彼に指環を投渡して、窓を閉めた。

少年は指環を拾上げて、一生懸命走り出した。そして、三分間の中に契約の樹の所に現れたのであつた。此處で彼は、息づき乍ら、立止つた、そして四方八方を見廻して、指環を置いたのである。用事を安全に濟して、彼が即刻その事に就いてマリヤ・キリーロヴナに通告したいと考へた矢先き、俄に赤髪の、襤褸々々の着物を着た小僧が亭の蔭から身を閃かし、樫の木に飛んで行き、手を洞の中に突込んだ。栗鼠よりも敏活なサーシャは彼に向つて飛掛り、双手で引つ攫んだ。

『何を貴様は此處でするんだ?』と彼は嚴しく云つた。

『貴様の知つた事かい?』小僧は彼から身を拔かうと蹠き乍ら答へた。

『その指環を置け、コラ、赤髪』サーシャは叫んだ、『さうしないと、思ひ存分貴様をひどい目に遇すぞ』

返答の代に、奴は拳骨を以て彼の顏を打つた。けれども、サーシャは彼を放さず、聲の限り叫立てた。

『盗人だ、盗人だあ!此處だ!來て呉れ!』

小僧は彼から離れ遁れようと懸命に努力した。彼は、一見、サーシャより二つは年長で、彼よりも馬鹿に力が強かつた樣である。然しサーシャの方がすばしこかつた。彼等は數分間、唾合ひ、攫合つた。頭到赤髪の小僧が勝つた。彼はサーシャを地にぶつ倒して、喉をひつ攫んだ。ところが、此の瞬間に、力の

強い手が彼の赤い、あら毛の髪を引張つた、そして園丁のステバンは地から半アルシンも彼を提上げた。

サーシャは跳起きて、身を正す事が出來た。

『貴様は己を腋下に巻込みやがつたな』彼は云つた、『さうぢやなかつたら、己は貴様なんかに滅多にやられはしないぞ。コラ、指環を直ぐに此方へ渡しといて行つちまへ！』

『馬鹿を抜かせ』と赤髪は答へ、そして俄に、一方に身を廻轉してステバンの持つ手からあら毛を離さした。

こゝで彼は走つて逃げようとしたのであつた。ところが、サーシャが追附き、背中を突飛した、と、少年は兩足を浮して、バッタリ倒れた。園丁は再び彼を捕へ、帶を以て引縛つた。

『指環を渡せ！』とサーシャは叫んだ。

『お待ちなさい、坊ちやん』ステバンは云つた。

『彼奴を執事の所へ詮議して貰ひに引張つて行きませう』

園丁は捕虜を邸に引張つて行つた、そして、サーシャは、引裂かれたり、草に汚れたりしてゐる自分のズボンを不安に眺め乍ら、彼を伴つて行つた。俄に三人とも皆、丁度自分の厩を檢視に行く所のキリーラ・ペツローウィッチの前に現れた。

『それは何だ？』と彼はステバンに尋ねた。

ステバンは出來事の一切を簡單な語に述べた。

キリーラ・ペツローウイッチは注意して彼の云ふ事を聽いてゐた。

『此の剽戯者奴』彼はサーシャに向つて云ひ掛けた『なんで貴様は彼奴と一

緒に遊んだんだい？』

『彼奴が洞から指環を盗んだのです、お父つちやん、指環を渡せつて云つておやりなさい』

『怎んな指環だ？何んな洞からだ？』

『あの、マリヤ・キリーロウナが僕に……その指環は……』

サーシャは混亂し、縺らし、迷うた、キリーラ・ペツローウイツチは顔を顰め、頭を振り乍ら、云つた。

『ウン、これにはマリヤ・キリーロヴナが屹度關係してゐたのだ。みんな白狀して了へ、さうしないと、貴様が今迄に知らない程のひどい目に枝でぶつてぶん擲るぞ。』

『決して、お父つちやん、僕……お父つちやん……僕にマリヤ・キリーロヴナ

は何にも吩咐けはしなかつたのです！お父つちやん』

『ステバン！行つて來い、そして、良い奴を截つて來い、新しい樺の枝を』

『勘忍して、お父つちやん、僕みんな貴方に話しちまひます。僕が今日ね、外を走つてたのです、そしたら、マリヤ・キリーロヴナ姉さんが窓を開けたのです。それで僕走つて寄つたのです。そしたら、姉さんが怪我に指環を墮したのです、それから、僕それを洞の中に匿したのです、そしたら……そしたら、……此の赤髮の小僧が指環を盗まうと思つたのです』

『怪我に落した、貴様が匿さうと思つただと……ステバン！枝を取りに行け』

『お父ちやん、待つて頂戴、僕みんな云ひますよ、マリヤ・キリーロヴナ姉さんが僕に樫の木の所へ走つて行つて、指環を洞の中に入れて置いて呉れと吩咐

けたのです。僕それで、走つて行つて、指環を置いたのです。そしたら、此の穢らはしい小僧が……』

キリーラ・ペツローウイツチは穢らはしい小僧に向ひ、嚴しく彼に訊いた。

『貴様は何處の者だ！』

『わたへヅブロフスキーの旦那様に仕へてる者だす』と彼は答へた。

キリーラ・ペツローウイツチの顏は曇つた。

『貴様は、すると、己を主人とは認めてない様だな――宜しい。所で、何を貴様は己の宅の庭でしてたのだ？』

『苺を盜んでるただ』と少年は全く平氣のしやーで答へた。

『アハァ？家來は主人に似る。檀家は僧主にこそ似てゐれど。苺は己の所の樫の木になるだらうかな？貴様はさうと聞いた事でもあるのか？』

少年は何も答へなかつた。

『お父つちやん、彼奴に指環を渡せつて云つて頂戴』とサーシャは云つた。

『默れ、アレクサンドル！』キリーラ・ペツローウイツチは答へた　貴様は己が今處分してやらうとしてゐる事を忘れな。おぬしの部室へ這入つて行け。コラ、佞者（ねぢけもの）、貴様は仲々喰へぬ奴だな。若し貴様が己にみんな白狀したら、そしたら、己は貴様を殺さないで、その上、胡桃代を五錢遣らう。指環を渡して、行つた、』

少年は拳を開き、彼の手に何もない事を示した。

『渡さないなら、己は貴様の知らないひどい目に遇してやるぞ。さあ、何うだ！』

少年は一言も答へず、頭を垂れたまゝ、本當の馬鹿者の様な風をして立つて

る た。

『宜しい！』キリーラ・ペツローウイツチが云つた、『彼奴を何處かへぶち込んで置け、それから彼奴が逃出さぬやうに見張つてをれ、まさか違つたら、貴様等は片つ端から命はないぞ』

ステバンは少年を鳩舎へ引張つて行き、其處へ彼を閉込んで、年老いた鳥飼女のアガーフイヤを彼の見張に立てた。

『ウン、之には何等の疑はない――娘はあの忌々しいヅブロフスキーとの交際を守つて來たのだ。一體娘が本當に彼奴を援助に呼んだつて事が有り得るか知らん？』とキリーラ・ペツローウイツチは、部室中を歩廻り、例の「勝鬨天地に轟きぬ」を自棄に吹鳴し乍ら、斯う考へたのであつた。

『恐らく、己は彼奴の顯跡を見付けたのだ、おのれ、今度は此方の手から遁

してなるもんか、我々は此の機會を利用するんだ……チウ！鈴だ。おゝ、占めた、彼奴は警察署長だ。押籠めといた小僧を引こづつて來い』

その間に、箱馬車は邸内に乘込んだ、そこで、我々に剛染の警察署長が部室の中へ這入つて來たのを見れば、全身埃塗れだ。

『目出度い知報があるです！』キリーラ・ペツローウイツチが云つた『私はヅブロフスキーを捕へたですよ』

『おゝ、お目出度う、閣下！』警察署長は喜色を滿面に漾はして答へた『何處に彼は居りますか？』

『そりや、その、ヅブロフスキーではない、然し彼の徒黨の一人です。今引張つて來る所です。其奴が我々に本物の賊魁をひつ捕へる助をするです。ほれ、彼奴を引張つて來た』

獰猛な恐しい山賊を見せられる事と待構へてゐた警察署長は、可也弱々しい外貌の、十三ばかりの小僧を見て、驚かされたのであつた。彼は疑惑を以てキリーラ・ペツローウイツチに向ひ、その説明を待つてゐた。キリーラ・ペツローウィツチは、茲に於て、朝の出來事を話し出したが、然し、マリヤ・キリーロヴナの事は一向に口を利かないでゐた。

警察署長は小さい悪漢を絶えずヂロ〳〵眺め乍ら、注意して彼の話す事を聽いてゐた、當の奴さんは、己を伴つて、馬鹿になり澄し、何事と云はず、彼の身邊に爲されてゐる事には一切無頓着な樣子に見えた。

『何卒、閣下、離れた所へ行つて話さして戴きたう存じます、』と遂に警察署長は云つた。

キリーラ・ペツローウイツチは彼を他の部屋へ導いて行き、後に扉を閉めた。

半時間も經て、彼等は再び大廣間に出て來た、其處では囚人が自分の運命の決定を待受けてゐたのである。

『旦那樣はすぐおつしやつたぞ』警察署長が彼に云つた『お前をね、監獄へぶち込んで、樹の枝で鞭ち、それから殖民地へ追放したいつて。然し私がお前の爲に入つて行つて、お前にお許を願つたのぢや。彼を解いてやれ！』

少年は解かれた。

『旦那樣にお禮を云はう！』と警察署長が云つた。

少年はキリーラ・ペツローウイツチの許へ近づき、彼の手に接吻した。

『サツサと宅へ歸れ』キリーラ・ペツローウイツチは彼に云つた『それから、今後決して洞の中で苺を盜んではならんぞ』

少年は家を出て、樂しさうに階段を飛下りて、一散に駈出し、傍目も振ら

ず、野原を越え、キステーネフカへと走つた。

村まで駈着いて、彼は、外れから第一番目の、半分倒れ掛かつてゐた小舍の方に立止つて、窓を叩いた。窓戸が上り、老女が現れた。

『婆さん、パン！』少年が云つた『わたへ朝から何にも食はないでゐるんだ、腹が空つて死ぬる』

『おや、まあ！お前か、ミーチャ。だつて、まあ、何處に去せ居つただい、小鬼？』と老婆は答へた。

『後で話すよ、婆さん、後生だから、パン！』

『これ、家へ這入れ』

『暇がない、婆さん。わたへ、もう一ケ所走つて行かにやならん。パンだ、お利益だからパン！』

『何と云ふガサ〳〵者だらう』老婆はブツ〳〵云つた、『さあ、此を』——そして窓から黑パンの片を差出した。

少年は貪り噬みつきわし〳〵と嚙みつゝ一歩々々先きへと赴いた。

黃昏れ始めた。ミーチャは乾燥用建物や菜園を過ぎ、キステーネフカの森へと入つた。森の前方の番兵として立つてゐる二本松まで辿着いて、彼は立止り、周圍八方を見廻し、突き貫く樣な音で口笛を吹鳴し、又一寸斷つては、聽耳を欹てた。輕い、長く續く口笛がその返答に彼の耳に聞えて來た。誰かが森の中か出て來て、彼に近付いたのであつた。

十八

キリーラ・ペツローウィツチは、例の、十八、番を平生よりか音高く吹鳴しつ

丶、大廣間の中を行きつ戻りつした。家中全體はやつさもつさの騷ぎであつた。下男共は走り廻り、女中達は忙しさうに世話を燒いてゐた。馭者の小舍ではみんなして馬車に馬の用意をしてゐた。屋敷内には澤山の人々が集つてゐた。令嬢の化粧室では、鏡の前で、一婦人が、下女達に取卷かれて、眞蒼な、身動もしないマリヤ・キリーロヴナを飾り寥してゐた。彼女の頭は金剛石の重さの下に懶く垂れてゐた。不注意な手が當針でチクと彼女を刺した時に、彼女は少しばかりビクツと身を振したが、心は空にぼんやりと鏡を見詰めたまゝ、默つてゐた。

『直ぐかい?』とキリーラ・ペツローウイツチの聲が扉の方で響渡つた。

『只今出來上ります!』婦人が云つた。

『マリヤ・キリーロヴナお立ちなすつて、御覽なさいまし、宜しうございますか?』

マリア・キリーロヴナは立つた、が何も答へなかつた。扉が開いた。

『花嫁樣が御仕度出來ました』婦人はキリーラ・ペツローウイツチに云つた

『何卒、馬車をお召しなさいます樣おつしやいませ』

『道中安らかなやうに!』キリーラ・ペツローウイツチは答へ、そして——卓子から聖像畫を取上げて

『私の所へお出、マーシャ』彼は感動的な聲で彼女に云つた、『お前を祝福して上げるぞ……』

哀れな娘は彼の足許に倒れ、さめ〴〵と泣き頽折れたのであつた。

『お父さま……お父樣……』と涙ながらに彼女は云つた、そして、その聲は微に絶えた。

キリーラ・ペツローウイツチは急いで彼女を祝福したのであつた。彼女は起されて、殆ど運ぶ樣にして馬車(カレータ)に連行かれた。彼女と共に教母と一人の下女が乘込んだ。彼等は教會に行つた。其處では花婿が既に彼等を待つてゐた。彼は花嫁を迎へに出て行つて、その眞蒼な顏と、變な風體とに喫驚させられた。彼等は一緒に、その冷い、伽藍(ガラン)然とした教會に這入つた。彼等の後の扉は閉つた。牧師は祭壇から出て來て、直ぐに式を始めた。マリヤ・キリーロヴナは何も見なければ、何も聞かなかつた。朝からずつと一つの事に就いて考へてゐた。ヅブロフスキーを待つてゐたのである。希望は一分だも彼女を捨去りはしなかつた。然し、牧師がお定りの問を以て、彼女に向つた時には、彼女は戰き震へて、殆ど失神せんばかりであつた。併し、尙も躊躇し、尙も期待するところがあつた。牧師は、彼女の答を待たずして、取返す事の出來ない語を云つて了つた。

儀式は終つたのである。彼女は厭な夫の冷い接吻を感じた。彼女は居合せる人々の祝詞を耳にした、而も、彼女は未だ全く自分の生涯が永久連鎖に繫がれた事も、ヅブロフスキーが自分を救出しに飛んで來なかつたと云ふ事も信ずる事は出來なかつた。公爵は優しい言葉を以て、彼女に向つた——彼女はそれを解しなかつたのである。彼等は教會を出た。玄關前の石段ではボクローフスコエからの百姓共が人山を築いてゐた。彼女の目がチラッと彼等の上を走つたと思つたら、再び以前の通りの無感覺に陷つて見えたのである。新婚者は馬車(カレータ)に一緒に席を占め、某所に向つて出發した、キリーラ・ペツローウイツチはも早其處で彼等を迎へる爲に先に赴いてゐた。若い妻と差向で、公爵は彼女の冷い顏付は見ても、少しも顏を曇せなかつた。彼は、甘垂るい打明話や、滑稽な感激などで彼女に五月蠅く强諫(ねだ)つて窘める事は仕出さなかつた。彼の言葉は單純であ

つて、答は要求しなかつた。斯様な有様で彼等は十露里(ウエルスター)ばかりも行つた。馬は小丘のある村間の道を迅速に馳飛んだ、それに、馬車(カレータ)はその英國風の發條(はね)の上で殆と搖れなかつた。俄に追擊の叫びが響渡つた。カレータは止つた。そこで武裝した人々の群集はそれを取卷いた。半マスクを掛けた男が若い公爵夫人の坐つてゐた側から扉を開いて、彼女に云ひ掛けた。

『貴女は自由です！お出なさい』

『それは何事だ？』公爵は叫んだ『貴樣は何者だ？』

『あれはヅブロフスキーです』と公爵夫人は答へた。

公爵は、毅然として、狼狽へず、片脇のポケットから旅用のピストルを取出して、マスクを被つた盜賊に對つて發射した。公爵夫人は叫聲を立て、恐れ戰いて、双手で顏を覆つた。ヅブロフスキーは肩に負傷してゐた。血潮は流れ出

た。公爵は、一分も遲さず、も一つのピストルを取出した。然し、彼は發射する時間を與へられなかつた。扉は開け放たれた、そして、幾つかの力强い手がカレータから彼を引摺り出して、彼からピストルを捩取つた。彼の上には短刀が輝いてゐた。

『彼奴にあたるな！』とヅブロフスキーは叫んだ、すると、恐しい彼の仲間は引下つた。

『貴女は自由です！』とヅブロフスキーは哀れな公爵夫人に向つて語を續けた。

『否え！』彼女は答へた『遲うございますわ！私は結婚致しました。私はヴエレイスキー公爵の妻ですわ』

『何をおつしやるのです！』ヅブロフスキーは絕望して叫んだ。『否！貴女は

彼の妻ではありません、貴女は强迫されてゐたのです、貴方は決して承諾される事は出來なかつたのです……』

『私は承諾しましたの、私は誓をしましたわ』

と彼女はきつぱり云つた。

『公爵は――私の夫ですわ、彼の人を放してやれとおつしやいまし、そして、私を彼の人と共に殘して行つて下さいまし。私は嘘をつきませんでしたわ、私は貴方を最後の瞬間まで待ちましたわ……然し、今は、貴方に申しますが、今は遲うございます。私達を行かして下さいまし』

併し、ヅブロフスキーは最早彼女の言ふ事は聞いてゐなかつた。傷の痛みと魂の强い激動とが彼の力を墜した。彼は車の輪の所に倒れた。そこで盜賊共は彼を取卷いた。彼は彼等に幾らか語を發する事が出來た。彼等は彼を馬上に跨

し、その中の二人は彼を支へ、も一人は轡の下を捕へて馬を引き立て、みんなは、道の眞中にカレータを、又引縛つてある下僕等や、解放たれた馬等を殘して、一方に引揚げた、然し、何にも掠めず、又自分等の賊魁の血に對しての復讐に一滴の血さへも流さずに行つたのであつた。

十九

鬱蒼たる大森林の眞中に於て、峽い草生の上に壘壁や堀から成つてゐる小さい土の城塞が堆高くなつてゐた、その向うには幾つかの小舍や、土窟（つちぐら）があつた。圍の內では、その種々雜多の着物や、有ゆる武器からして山賊だと直ぐに見分けの出來た多くの人々が共同の釜の周りに、帽子を被らずに坐つたまゝ、食事をしてゐた。壘壁の上に於ては、小さい大砲の傍で、守兵は足坐をかいて

るた。彼は、老練な裁縫師を明示する器用さで針を繰り乍ら、自分の衣服の或る個所に繼を當てゝゐるて、絶えず時々四方八方を見廻した。

或る種の杓子は手から手にと數回渡つて行つたものゝ、奇態な沈默が此の群集の中を支配してゐた。山賊共は食事を終へた。次々にと席を立つて、それから神に祈つた。或者は小舍の邊を歩廻り、又或者は林を逍遙いたり、或はロシヤ人の常として、眠らうとして横つた。

守兵は、自分の仕事を終へ、自分の財産を振ひ、其の繼に感心して見惚れ、袖に針を刺した、そこで大砲に馬乘りになつたと見れば、今度はあらん限りの聲を張上げて陰氣な、古風な歌を歌ひ出した。

靜かにあれや、音立てず、母なる綠の樫の木よ。
私を騷し、邪魔するな、私や若うて思に耽る。

此の時、一つの小舍の扉が開いた、すると、白の頭巾を被つて清楚に且つおしやれに衣を纏うた老女が閾の所に現れた。

『澤山だよ、スチョープカ』彼女は憤つて云つた、『旦那はお息みになつてゐるんだよ、それにお前さん何てこつたい、お構ひなしに、聲限り歌ひ叫んでるなんて。お前達には良心も、思遣りつて事も無いんだね』

『是はとんと失禮、ペツローヴナ』スチョープカは答へた。『心得ました。もうやりません、親分に休みたい丈け息まして、よくなるのをば待つてゐますぞ』

老婆は立去り、スチョープカは壘壁の邊を彼方此方と歩き出した。

老婆の出て來た小舍の内では、隔壁の向うに、傷ついたヅブロフスキーが戰用の寢臺の上に横つてゐた。彼の前の小さい卓子の上には自分のピストルが置い

てあり、サーベルは頭上近く懸つてゐた。土小舍の内は高價な絨壇で吊飾られ敷被はれてあつた。片隅には婦人の銀の化粧臺や、照身鏡があつた。ヅブロフスキーは開いた書物を手にしてゐた、然し彼の眼は閉つてゐた。そして、隔壁の向うから眺めてゐた老婆は、彼が眠つたか、それとも、ただ冥想に耽つてゐたのか知る事は出來なかつた。

俄にヅブロフスキーは喫驚した。城塞に騷擾が起り、スチョープカは彼の枕邊の窓に來つて彼を呼醒した。

『親分、ウラヂミル・アンレーウィッチ！』

彼は叫んだ『我々共を搜索に來ましたぞ』

ヅブロフスキーは床から飛起き、武器を携へて、小舍を出た。山賊は圍の内に騷々しく群つてゐた。彼の現れたに依つて、深い沈默が一同を訪れた。

『みんな此處に居るか？』とヅブロフスキーが尋ねた。

『斥候の他はみんな居ります』と彼等は答へた。

『各自位置に就け！』とヅブロフスキーは叫んだ、すると、山賊共は各自定つてゐる席に就いた。此の瞬間に三人の斥候が門に近づいた。ヅブロフスキーは彼等の許へ迎へに行つた。

『何だ？』と彼は訊いた。

『兵隊が森に押寄せました』彼等は口々に答へた『我々共を取卷いてゐますぞ』

ヅブロフスキーは門を鎖す事を命じ、自らは大砲を檢べに行つた。森林の中で幾つか聲が響渡つた、と、近寄つて來た。山賊共は默つて、待受けてゐた。俄に三四人の兵卒が木立の間から現れたと見ると、直ちに仲間の者に信號の發

砲をして、後に引退つた。

『戰鬪の用意しろ！』とヅブロフスキーが云つた、すると、狐鼠々々つと一種の物音が山賊共の間に起つた。再び凡てが沈り歸つた。その時、近づいて來る一隊の騷音が聞えた、武器が樹の間に晃き、輝いた。百五十人約りの兵卒は森の中から飛出して來て、喊聲と共に壘壁に向つて突進した。ヅブロフスキーは火繩を近附けた。發砲は美事成功であつた——一人は首を飛し、二人は負傷した。兵卒共の間には混亂が生じた。然し將校は前に突入し、兵卒共は彼に續いて、塹壕内に駈下りた。山賊共は小銃や、ピストルを彼等に發射け、それから手に手に斧を持つて壘壁を防禦し始めた。その上へは、激怒した兵卒が壕内に二十人ばかりの負傷した仲間を殘し置いたまゝ攀上つて來るのであつた。接戰が行はれた。兵卒共は最早壘壁の上に攀上つてゐた。山賊共は負けかゝつた。

併し、ヅブロフスキーは將校の許へ近づいて行き、彼の胸にピルスルを突付けて發射した。將校は下方にドシンと墮ちた、數名の兵卒は彼の腕を攫んで引起し、急いで森に運んで行つた。殘餘の者共は彼等の隊長を失つて、戰を中止した。勵された山賊共は此の躊躇の一分間に乘じて、彼等を蹂躙し、塹壕の中まで押詰めた。攻圍軍は遁走した。山賊共は喊聲を擧げてその後に突擊した。勝利は決定してゐた。ヅブロフスキーは敵の全然壞敗した事を思つて、己の部下を止め、守兵を二倍にし、誰にも離れる事を命じないで、負傷者を收容する事を吩咐けて置いて、要塞内に閉じ籠つた。

最後の出來事は最早冗談ではなく、ヅブロフスキーの强盗に對して政府の注意を惹起したのであつた。彼の住所に就いての報知が集められた。歩兵の一中隊が、殺すも生すも、彼を捕へる可く送遣された。彼の徒黨の中の數人が捕へ

られたので、それから、ヅブロフスキーが最早彼等の間に居なかつた事が知られた。あの事件の後、數日して、彼は、自分の凡ての同類を呼集めて、自分は永久に彼等と別れる考だと云ふ事を明し、彼等にも生活の狀態を更へる事を忠告したのであつた。

『お前達は私の指揮の下に富裕となる事を得たのだ、お前達は各自みんな旅券を持つてゐるからして、それを以て何處か遠く隔つた州(くに)に落ちのびる事が出來、正業に入つて、その上充分裕福に殘りの生涯を暮して行く事が出來るのである。然し、お前達はみんな泥棒だ、そして、確かお前達の職業は止めて了はうとは思はないだらう』

此の說敎の後、彼は或一人の從者を連れ、彼等を殘して行つたのであつた。誰も、何處へ彼が隱れて了つたかを知る者はなかつた。最初は此の表明の眞が

人々に疑はれてゐた——賊魁に對する山賊共の心服が明白だつたからである。そして、彼等は彼の救助に就いて力めたものと見做された。然し、結果は彼等の言を正當にしたのであつた。恐しい襲擊や、放火や、掠奪は止んだ。道は安全となつた。他の報知に依つてヅブロフスキーは外國に隱れたと云が事が分つた。(了)

お嬢さんの百姓娘

可愛いお前は何時見ても
何を着てゝも美しい

遠く隔つてゐる我々の州(くに)の一つにイワン・ペトローウイッチ・ベーレストフと云ふ人の所有地があつた。自分の若い時代に彼は近衛隊に入つてゐたが千七百九十七年の初に退營して自分の村に歸還して以來といふもの、其處から何處へも出て行かなかつた。彼は貧乏な貴族の女と結婚してゐたが、その女はお產の時、それも丁度彼が野らへ出て行つた留守中に於て死んで了つた。が生計上の色々な仕事は彼を慰めて呉れた。彼は自分自身の考案に依つて家を建て、自分の所で羅紗の工場を始めて、收入の道を見出した。そこで、彼は其處ら近所近在では自分が一番賢い者と考へ澄してゐた。それに對しては、彼の許へ自分の家

族や、犬を携へてお客となつて來た近隣の人達は反對は唱へなかつた。

働日には彼は綿剪絨（ブリス）のジャケツを着し、祭日々々には自分の宅で出來た羅紗で拵へたフロックコートを着て歩いた。出費は何時も自分で記入する事にしてゐた、而して「元老院新報（セナーヴスキーウエドモスチ）」以外の物は何（なん）にも讀まなかつた。一般には彼を傲慢だとは思ひ乍らも、愛してゐた。茲に彼の最も近い隣人であるグリゴーリー・イワノウッチ・ムロムスキーは一人彼を喜ばなかつた。

此の人は純粹のロシヤ紳士であつた。モスクワで自分の財産の大部分は遣ひ果し、鰥夫（やもを）にはなつた擧句、彼は最後の自分の村へ引越した。其處で、相も變らず、不眞面目な徒事を續けてゐた、とは云ふものゝもはや、以前のとは全然（まるきり）變つてゐた。彼はイギリス風の庭園を設置し、それに殘りの所得の殆ど全部を費して了つた。彼の馬丁はイギリスの競馬騎手の服裝をしてゐたし、彼の娘達に

はイギリス婦人が附けてあつた。そして彼は自分の田畑をイギリス式の方法で耕作した……

併し、他の方法に依つてロシヤの穀物は出來ないに定つてゐる——又、出費は著しく削減されたにも拘らず、グリゴーリー・イワノウィッチの所得は增さなかつたのである。彼はその村でさへ新しい借金をする事の手段を發見した。それにも拘らず、彼は愚物だとは思はれてゐなかつた。何故なら、自分の國に於ては地主にして後見役場に所有地を抵當に入れる事を思付いた者は彼を以て矯矢とするのである、——金融はその時代に於ては非常に面倒で冒險的に見做れてゐたのである。彼を非難する人々の中で最も猛烈の聞えのあつたのはベーレストフである。改革に對する嫌惡は彼の性質の特徵であつた。彼は自分の隣人のイギリス崇拜に就いてはとても平氣では語れなかつた。そして、絕えず屢々彼

を非難する機會を發見した。自分の領地を客に見せたとして、その場合、彼の家事上の色々な處理按配に就いての客からの讃辭に對する答としては、彼は猾さうな微笑を見せ乍ら、

『諾、左様でございまして！私の所のは隣のグリゴーリー・イワノウイッチのとはすつかり違ひまして御座居ます、まあ、貴方、何だつて我々にはイギリス流儀に依つて破産して了ふ必要がございませう！それよりか、何ならロシヤ流儀に滿腹でもして居たいでございますよ』と云つた。

是等の、又同じ種類の戯言は隣人達の熱心に依つて尾鰭を附け、註釋を加へて、云傳へ〳〵して、とうとうグリゴーリー・イワーノウィッチの耳にまで入つたのであつた。イギリス崇拜者は、恰度我々の新聞記者共の如に、全く我慢が仕切れない程褻褻糞に罵り出した。彼は激怒し、自分の此の不當な非難者に熊

と田舍者の緯號を付けたのであつた。

此の二人の地主の間に斯かる交際關係のあつたその頃、ベーレストフの息子が彼の村へ歸省した。彼は或る大學で教育を受けて居て、軍人に成らうと考へてゐた。が、それには父が贊成して呉れなかつた。文官になるには自分は全く無器量だと青年は思つてゐた。双方とも互に相讓らなかつた。而して、若きアレクセイはその間、贅澤な生活をやつて居り、口髭は萬一の爲め生してゐた。

アレクセイは天晴れの若者であつた。實際、若しも彼の立派な體軀を一度も軍隊の正服が密しりと纏ふことがなかつたとしたら、又若しも彼が、馬上にその瀟洒な容姿を示すことの代りに事務局の書類の上に體を曲げてゐて、可惜自分の青年時代を過したとしたら遺憾な事であつたに相違ない。狩獵の場合、彼が常時眞先に立つて、錄に路も撰ばず、跳ね廻つてゐた事どもから觀て取つた

近隣の人達は、彼なら實着な課長なんかには成りつこないと一様に口を揃へて云つた。若い女共は彼を眺めたり、又時には竊見さへした。然し、アレクセイは彼女等に對しては殆ど冷淡であつた。そこで、彼女等は彼の冷淡な事からして彼には深い戀愛關係のある事と想つた。實際の話が彼の手紙の一通の宛名から次のやうな寫書が若い女達の手から手にと傳つた。

『モスクワなる、アレクセーエフ修道院の向側にて銅金物商サヴエーリエフ方、アクリーナ・ペツローブナ・クローチキナ様、何卒此の手紙をA、H、P、に御屆け被下度御願ひ申上候』

讀者諸君の中でこれまで一度も田舍に住んだ事のない方々は、此等の郡の若い女達が如何に素敵だか、とても自分に想像することは出來ない！清淨な空氣に浴し、自分等の庭園の林檎の木蔭で教養を受けた彼女達は世界なり人生なり

の知識と云ふものを書物の中から汲取つてゐるのである。孤獨と自由と讀書は、周圍の物などには一向に無頓着な我々の美しいお孃さん方には知られない感情や情慾を早く彼女達に於て發達さしてゐるのである。若い女達に取つては馬の鈴の音を耳にするさへ既に變事である。だからして近い町に旅行した事が生涯に於ける一つの紀元として考へられるのである。それから客の訪問と云ふ事が長い間の、或は、時として、永久の想起さへ留めるのである。勿論、彼女達の或る變ちきな所のあるのに何人も吹き出したくなるのは無理はない。然し乍ら、皮相な觀察者の冗談が彼女達の本來の價値を滅する樣な事は出來ない、その價値の重なるものとは卽ち、氣質の特異、獨自の人格（individualité）であつて、ヂヤン、ポーリ（一七六三—一八二五小說家著名なド人イツロマンチシズム提唱者の一人）の筆法に從へば、それなくしては人間の偉大さを有しないのである。都市に於ては女子は、多分、もつと良い

教育を受ける事が出來るであらう、然し、世間の習慣と云ふ奴は直に氣質と云ふものを同じものにして了ひ、そして、精神を恰も頭飾かなんぞの樣に同一の形に作つて了ふのである。だが、勿論、此の事で問題を提出して批判を試みんとした譯ではない。でも或る古の評釋者の書いてゐる如にNota nostra manet（我々の注意が止つてゐる）である。

アレクセイが是等の若い女達の周圍に何んな印象を留めずに措かなかつたかは容易に想像の出來る事である。彼は彼女達の前に始めて陰鬱なそして厭世的な人間として現れた。即ち彼女達に失はれた幸福に就いて語り、萎衰して了つた自分の若い時代の事を話した第一人者で、その上、彼は髑髏の像られた黑い指輪を欽めてゐた。かうした事は全くその州に於ては（譯者曰く此の時代ロシヤにはバイロニズム盛なりき）素晴らしい新奇なものであつた。若い女達は彼に魂を拔かした。

併し、その中で最も夢中だつたのは例のイギリス崇拜家の娘リザ（又はベッシー。彼女をグリゴーリー・イヴーノウィッチは常時さう呼んでゐた）である。父親達は互に往來をしなかつた。從つて、彼女はアレクセイを未だ見た事がなかつた、それに、何うかと云つたら、隣人の若い女達はみんな、何か話でもするとなれば、ただ、もう、彼の事ばつかりと云ふ風であつた。彼女は十七歳であつた。黑い眼は彼女の淺黑い、非常に愉快な顏を生々とさしてゐた。彼女は獨子であつた、で、從つて、我儘な子供であつた。彼女の機敏な事や、絕えずやる惡戲事は父を無暗に歡ばせ、又、彼女を預る婦人のミス・ジャクソンを失望に導いたのであつた。その婦人は四十歳の、おしやれの女で、白粉も塗付ければ、眉も繪取つた、それから、一年に二回バメラ（リチヤールドソンの小說の名前）を讀通して、それに對しては二千留を受けてゐたが、その退屈な生涯を此の野蠻なロシヤに

終へて了つたのであつた。

リザにはナスチャが仕へてゐて色々な世話をしてゐたのであつた。彼女は少しばかり年長であつた。併し、これも彼女のお嬢さんに負けず劣らずの輕浮者であつた。リザは彼女を大變愛し、自分の凡ての祕密はそれに打明け、自分の企畫は彼女と共に考へた。一言にして掩へば、ナスチャは、プリルーチノ村では、佛蘭西の悲劇小説に現れる腹心の寵女よりももつと遙に肝腎な人間であつた。

『妾今日はお客様に行かして下さいませね』と或時ナスチャは、お嬢さんに着物を着せ乍ら、云つた。

『よくつてよ。けれど何處へなの?』

『ツギーロウォの所ですの、ベーレストフの宅へでございますわ。彼處の宅の料理人さんの家内が命名日に當りますの、そして、昨日妾達を御馳走に呼び

に來ましたのよ』

『まあ!』リザは云つた『主人は爭つてゐるのに、召使の人達つたらお互に御馳走し合つてゐるのね』

『だつて、妾達の事を旦那様の知つた事ではないぢやありませんの?』ナスチャは反言した『それに、妾は貴嬢にこそ仕へてますけれども、お父様にではありませんもの。貴嬢は、ほら、まだ、ベーレストフの若さんを罵しはしなかつたですわね。年寄の方にはお勝手に喧嘩をさして置けばいゝぢや有りませんの、それが彼の人達に面白いのでしたら』

『ぢや、能くね、ナスチャ、アレクセイ・ベーレストフを觀て、それから、彼の人が怎んなに見えるか、何んな人間かをよく談して頂戴よ』

ナスチャは約束した。そこで、リザは苛々し乍ら、終日彼女の歸りを待つた

のであつた。晩方ナスチャが現れた。

『さ、リザヴエータ・グリゴーリエヴナさん』と彼女は部室へ這入りつゝ云掛けた『ベーレストフの若さんを見ましてよ。十分に眺めましたわ、一日中一緒でしたのよ』

『怎んなだつて？お話し、さあ、始からお話し』

『良しうございます。妾達が參つて行きました、妾に、アニシヤ・エゴーロヴナに、ネニラにヅーニカに……』

『良いわ、良いわ、知つてゐるわよ。それから何うなの？』

『まあ、妾に任して下さいませ、初から皆んな事を分けて話しませう。妾達は、ほら、丁度御馳走の時分に行着きましたのよ。お部室はみんな澤山の人で一杯になつてゐましてね、コルビンスキーの婦人も居れば、ザハリエフスキ

ーの婦人も、それから、娘達と一緒に支配人のお神さんも、フルビンスキーの婦人達も、……』

『して、あのベーレストフは？』

『お待ち下さいませ。妾達は、ほら、食卓に就きましたわ、支配人のお神さんが第一番の席に、妾がその傍よ……すると、娘達つたら、まあ、脹面をしましたのよ、だつて、本當に、あの娘等つたら、妾、唾でもひつ掛けてやりたい位だつたわ……』

『まあ、ナスチャつたら、お前さん、何時まで經つたつて、自分の詳細ばかり云つてゝは、本當に厭になつて了ふわ！』

『だつて、まあ、貴嬢の氣短なこと！ねえ、ほら、妾達が食卓から立つて行きましたの……あゝ、さうよ、妾達は三時間坐つてゐましてね、それから、御

馳走は大したものだつたわ。肉饅頭のブラン、マンジェの青いのや、赤いのや、條のあるのやね……さあ、そこで妾達は食卓を起つて、それから、庭へゴレールキ（鬼ごつこの如な一種の遊び）を遊に行きましたわ、そこで、さあ、若旦那さんが愈々出て來ましたのよ』

『さあ、それで？彼の人は立派だつて事、ほんま？

『喫驚するばかり立派ですのよ。美男子ですわ、確に。すらつとして、脊丈が高くつて、頬は紅色でね……』

『本當の事？けれど、妾はこう思つてたわ、彼の人の顏は青いんだと思つて。何うだつて？如何彼の人はお前さんに見えたの？悲しさう、考へ深さうだつて？』

『何を、まあ、貴嬢は？實際、彼麼に輕躁ぎ廻す人は妾生れてから見た事が

有りませんわ。彼の人がね、妾達とゴレールキをして走りつこするのを案出しましたのよ……』

『お前さん達とゴレールキをするんだつて？……出來ない事よ！』

『所が、大いに出來ましてよ。それから、まだ〳〵ありますのよ、何を考出したと思つて？捕へて、それから、ほれ、キスすること！』

『お前さんの勝手よ、ナスチヤ、嘘をおつき』

『貴嬢の御勝手ですわ、妾は嘘なんかついてはゐませんから。妾は彼の人から辛じて脱れましたわ、終日妾達とこんな風にして過したのでしたわ』

『だつて、まあ、皆は、彼の人が戀をして、誰にも見向をしないと云ふぢやないの？』

『存じませんわ、でも、妾を見てく、、ほんと厭になると云ふ程見てゐたの

よ、それから、支配人の娘のターニャもをんなじよ。さう〳〵コルビンスキーのパーシャもですわ。けれどね、誰にも恥をかゝしたつて事は云へませんわ。あんなに輕躁ぐ人ですもの』

『まあ、驚いたわ！で、宅では皆が彼の人の事を怎んなに云つてたの？』

『立派な旦那様つて皆んな云つてゐましたわ。大變お人が善くつて、大變愉快な人だつて。たつた一つ丈け悪い事があるつてましたよ。若い女達を、それ、餘り追廻したがるつて事。けれども、妾の考では、それも、まだ悪い事とは云へないわ。年が行けば、今に端正になる事ですからね、』

『まあ、妾、怎んなにか彼の人が見たかつたわ！』とリザは溜息を吐き乍ら云つた。

『だつて、それはお易い事ではありませんの？ツギーロウォは私達の所から

遠くはありませんわ　たつた三露里ですもの。彼の方へ散歩にいらつしやるか、馬に乘つてお出でなさいよ。貴嬢は屹度あの人に逢ひますわ。彼の人だつたら、何時でも、毎朝早く、鐵砲を持つて狩に出ますのよ』

『否え、そりやいけないわ。彼の人は、多分、妾が彼の人を追廻してると思ふわよ。それに、妾達のお父さんは爭つてゝよ、だから、妾、如何しても彼の人と知合にはなれないわ……あゝ、ナスチャ。分つて、お前さん？妾百姓娘の服裝をするわ！』

『さうよ、全く良い考ですわ。厚いシャツに、無袖服を召して、それから、ツギーロウォへ元氣よく、トン〳〵とお行きなさい。ベーレストフが忽々として貴嬢を見遁す事のないつて事は保證つて置きますわ』

『そして、妾は、此處の人の言葉を遣つて巧く言ふ事が出來るわ。あゝナス

チャ、可愛いナスチャ！まあ、ほんとに素敵な思附ぢやないの！』

そこで、リザは自分の樂しい豫想を間違なく遂行する考を抱いて、寢臺に横たはつたのであつた。その翌日には、彼女は自分の計畫の遂行に着手した。市場へ厚い織布と、青い南京綿布と、銅のボタンを買ひに遣り、ナスチャの手を借りて、自分にシャツと、サラファンを裁ち、女中共をみんな集めて縫はした。そこで、晩方には萬事は出來上つた。リザは新調の衣服を着試して見、そして、鏡の前で、自分は今までまだ、これ程氣に入つてよく見えた事は無かつたと云つた。彼女は自分の役割を練習して見た。歩く〳〵頭を低く下げるやら、それから、粘土製の猫にも似て幾度か頭をキク〳〵振るやら、袖で顏を匿して、百姓訛で話をするやら、笑ふやらやつて見た、すると、すつかりナスチャの氣に入つて了つた。一つ彼女に困つた事があつた。それは、彼女が跣で屋

敷を通つて行かうとしかけて見た所が、芝は彼女の嫋かな足を刺し、それから、砂や小石はとても彼女には堪へられない事が分つた。ナスチャは此の事にも彼女を助けたのであつた。彼女はリザの足から寸法を取つて、野らへ走つて牧羊者のツロフイムの許へ駈付け、その寸法で彼に鞋を一足註文して置いた。翌日は、鷄明に、リザははや目を醒したのであつた。家の者はまだ皆眠つてゐた。ナスチャは門の外で牧羊者を待つてゐた。角笛を吹いてゐるのが聞えて來た、すると、村の群羊は貴族の邸の傍を縱列にズツト打續いて進んだ。ツロフイムはナスチャの前に歩いて來て、彼女に小さい、斑の鞋を渡して、それから五十錢を報酬に受取つたのであつた。リザは、靜に百姓娘に身を俏し、ナスチャにはミス・ジャクウンに關する自分の訓誡を耳打して、後の階段から出て、菜園を過ぎ、野原へと走つた。

曉は東天に輝き、黄金なす、棚引く雲の條々は見えて、その太陽を待つ様は、いかにも、廷臣共の帝王を待迎へるにも似て見えたのであつた。明るい空、朝の新鮮、露、微風、さては小鳥の唄と、此等はリザの心を若い喜悦で一杯に滿した。誰か知る人に逢ふ事を慮つて、彼女は地を踏む己が足も空に、飛んで行くが如くに見られた。先祖傳來の領地の境界に立つ森の繁に近寄つて、リザは歩を緩め、除々と分け入つた。此處で彼女は長い間アレクセイを待つてゐた。彼女の胸は、なぜだかは分らないが、激しく動悸打つてゐた。然し、我々若者共の惡戯を伴ふ不安と云ふ奴が彼女達の心を魅する重な魔力を構成してゐるものである。

リザは森の薄暗い中に這入つて行つた。ざわ〳〵と梢を渡る風の音は乙女を歡迎した。浮立つてゐた彼女の愉快さは靜つた。だん〳〵と彼女は甘い冥想に

沈んで行つた。彼女は考へてゐた……併し、春の朝の六時に、十七歳のお嬢さんが森の中に於て只一人で、怎んな事を考へてゐるか、それを誰が正確に斷定し得るものぞ。そこで、彼女は思に耽りつゝ、双方から高い枝で蔭されてゐる道を歩いて行くと、俄に立派な獵犬が彼女に吠えかゝつた。リザは喫驚りして、叫んだ。其の瞬間にかう云ふ聲が響渡つた。

『tout beau, Sbogar, ici……(靜にしろ、スボーガル、此方へ……)

そして、若い獵師は灌木の間から現れた。

『御心配有りません、貴嬢』と彼はリザに云掛けた『私の犬は咬みはしません』

リザは、はや愕きから身を正すことが出來、透さずその機會を利用する事を得たのであつた。

『否、でも貴方』彼女は、半愕き、半遠慮してゐる様に見せかけて、云つ

た『妾怖うございますわ。あれをご覧じませ、彼麼に憤つちよりますよ。復飛びつきますわ』

アレクセイ(讀者は既に彼を認めた事である)は、其の間若い百姓娘をぢつと見詰めてゐた。

『若し怖けりや伴れてつて上げませう』彼は彼女に云つた『貴女は僕に貴女の傍で歩かして呉れますか?』

『誰に御遠慮が要りませう?』リザは答へた『貴方様の御勝手通りでございますわ、道は世界中の人のものでせうけえ』

『貴女は何處から來たのですか?』

『ブリルーチノからでございますわ。妾は鍛冶屋のヴワシリーと申します者の娘でございまして、菌を採りに行くのでございますわ。』

(リザは繩の付いてゐる籠を提げて來てゐた)もし、貴方は、旦那様、ツギーロウオの方でございませう?』

『全くそうです』アレクセイは答へた。『僕は若旦那さんの近侍です』

アレクセイに取つてはお互の關係を等しうすることが望ましかつたのだ。併し、リザは彼を眺めて、笑出した。

『え、あねえ嘘をお仰しやつて』彼女は云つた『妾は其麼に馬鹿ぢやあございませんわ。貴方がその旦那様ちう事は妾はちやんと知つちよりますよ』

『何うして貴嬢はさう思ひますか?』

『そりや、凡てに依つてでございますわ』

『だつて、併し?』

『そりや、あんた、何うして、旦那様と召使の差別がつかんちう事がございん

すか？それに、服装も其様にやありませんし、云ひ方も違ひます、それから、犬にも此の邊の語で云うてぢやござんせんもの』

リザは漸時に愈々アレクセイの氣に入つて來たのであつた。善良な田舍娘に對しては遠慮をしない癖があつたので、彼は彼女を抱締めようとしかけた。然し、彼女は、彼から飛退いて、俄に自分を非常に嚴格な、冷淡な體に繕つた、その事はアレクセイを非常に可笑しがらせはしたものゝ、彼から淫な行爲に出ずる事を差止めたのであつた。

『若しも、私達がお互に仲善い友達になつて居たいのでござんしたなら』とリザは澄した顏で云ひ出した『貴方は御自分をお忘れになつちやいけませんよ』

『誰が貴女にそんな賢い智慧を敎へて呉れたですな？』とアレクセイは呵々

と笑ひ乍ら、尋ねた。『それはナステニカではないですか、僕の知合の、ね、貴女方の若いお嬢さんの使女ぢやないですか？はあ！妙なものですね、敎化と云ふものは怎んな路を通つてでも擴つて行くものかと思ふと！』

リザは先づ自分の役割を無難に濟したと感じて、直ぐに元氣づいて來た。

『もし、貴方は何麼にお考へになつちよりますの？』彼女は云つた。『妾がまだ一度も旦那樣のお邸に行つた事がないとお考へになつてゝ？大丈夫でござんすわ。みんな聞いてもゐれば、見てもゐますから』

『それはさうと』と彼女は續けた『貴方とおしやべりばかりしちよつては、菌が採れませんわ。貴方は、旦那樣、貴方の御出でる所へお行きなさい、私は彼方へ行きますわ。ぢや、左樣なら』……

リザは離去らうとした。アレクセイは彼女の手を握つたのであつた。

『貴女は何と云ふ名ですの、ねえ?』

『アクリーナ云ひますわ』とリザは、アレクセイの手から己が指を離させようと力めつゝ、答へた『さ、放して下さんせつたら、旦那様、妾は家に歸る時ですもの』

『ぢや、私の親友のアクリーナさん、屹度貴女のお父さんの所へお訪ねしますよ、鍛冶屋のヴァシリーさんの所へね』

『まあ、何を貴方はおつしやるの?』リザは生々とした強い聲で云つた。『後生ですから、お出でなさらないで下さんせ。若しも家の者が、妾が貴方と森の中で窃り話をしたちうことを知りでもしましたら、それこそ妾に災難ですわ、妾の父さん、鍛冶屋のヴァシリーは死ぬる程妾を擲りますわ』

『だつて、僕本當に貴女にお逢ひしたいな——』

『ぢや、妾、何時か、復此處へ菌を採りに來ますわ』

『何時です?』

『さあ、何でしたら、明日でも』

『可愛いアクリーナさん、僕本當にキスさして欲しいんだがな、けれど強ひはしませんよ。ぢや、明日ね、此の時分に、本當でせうね?』

『えゝ、えゝ、本當でござんすわ』

『まさか僕を瞞しはしないでせうね?』

『瞞しはしませんわ』

『神様にお誓ひなさい』

『ぢや、それ、尊い金曜日に依つてね、來ますちう事を誓ひますわ』

若い人々は分れた。リザは林を出で、野原を越えて、庭園の中を忍び通つ

て、それから、迅速に田莊に走込んだ。其處ではナスチャが彼女を待つてゐたのであつた。其處で彼女は腹心の女の懊れつたい問には答へる心もうはの空で、衣を着更へて、客間へ姿を現した。食卓は整つてあり、朝餉は出來上つてゐた、そこで、ミス・ジャクソンを見れば、これは、はや、白粉をべた塗りに、引き締めたる腹の邊はさながら洋杯にも等しう見えて、頻りと薄つぺらなサンドウィッチを切つてござる所であつた。父は彼女が朝まだきより散歩に出て來た事に對して褒めそやした。

『何が健康に良いと云つたつて』と彼は始めた『曉に床を起き出る位藥になるものはないんだ』

玆に於て、彼は、英國の雜誌から拔取つた、人間長壽の例を幾つか引用して、百歳以上生き長らへた人はみんな火酒を飲まず、夏冬曉に起床した事を指

摘したのであつた。リザは彼の云ふ事に耳を傾けてはゐなかつた。彼女は、己が頭の中に、朝の面會の凡ての模樣、若い獵師とアクリーナの會話の一切を繰返して見た、すると、良心が彼女を苛嘖し始めたのであつた。彼女は、彼等の談話は適當の境から踏出したものではないと云ふ事と、此の戯串は何等の結果も及ぼし得なかつたと云ふ事に自分自身を納得させようとしたけれども、それは徒爾であつた、——彼女の良心はその理性よりも一層聲高に不平を鳴したのであつた。明日の日に對して彼女に依つて與へられた約束が何よりも一番大きく彼女を不安に感じさせたのである。彼女は、殆ど全く、自分の嚴な誓言を守らない事に決心しかけてゐたのであつた。併し、アレクセイは待ち呆けを食つた揚句、鍛治屋のヴァシリーの娘で、太つちよの痘斑面の女の正眞正物のアクリーナを村へ捜出しに行き、それから斯んな風にして、彼女の好い加減な惡戯を

察知したかも知れない。此の考がリザを戰慄さした、そこで、彼女は、翌日再びアクリーナの森に現れる事に決心したのであつた。

一方、アレクセイは歡喜の絶頂に身を置いてゐたのである。終日彼は新しい女友達の事を考へ通した。夜には、夢にさへも、淺黑い美人の姿は彼の想想を追求したのであつた。

漸く曉となるや、ならないに、彼ははや衣服を着してゐた。銃に裝塡するのも手間取らず、彼は自分の忠實なスボーガルと共に野に出て、面會を契つた場所へ走つた。彼に取つては堪へ切れぬばかりの待つ間も半時間ばかりは過去つた。遂に、彼は、灌木の間にちらりと青いサラファンを認め、愛しいアクリーナに會はうと、飛出した。彼女は彼の飛立つばかりの感謝の歡に笑顏を示した。然し、アレクセイは、直ちに彼女の顏の上に悲哀と不安の痕跡を認めたの

であつた。彼はその原因を知らうと思つた。リザは、自分の行爲が自分に輕卒だと分つた事、自分はそれを後悔してゐる事、此の度は約束を違へる事を欲しなかつたが、此の對面が最早最後であると云ふ事、さては、二人を何等の善い結果にも導いて行くことの出來ない此の交際關係を絶ち度いと願つてゐると云ふ事などを告白したのであつた。總て此は、勿論、百姓訛で話されたのであつた。併し、普通、凡俗の娘達に於ては見られない所の思想や、感情はアレクセイを感動させたのであつた。彼は、アクリーナにその意志を飜さす爲めに、自分の有ゆる雄辯を振つた。彼女をして、自分の希望の清淨であると云ふ事を信じさせ、彼女には、後悔する事の原因は決して與へないと云ふ事と、何事に就いても彼女に服從すると云ふ事を約束し、彼の唯一の慰安 — 例へ隔日であつても、例へ一週に二度であつても、彼女と密に會ふと云ふ事だけは奪去らないで

吳れと云ふ事を誓願したのであつた。彼は眞實熱愛の籠つた語を以て語つた。そして此の瞬間には全く戀に捕はれてゐたのであつた。リザは默つたまゝ、彼の云ふ事を聽いてゐた。

『妾に一言云うて下さんせ』彼女は遂に云つた。

『貴方が村で妾を搜したり、妾の事を尋ね廻したり決してしないちう事を。妾自身で定めるより他には、別に妾と逢ふ事を求めないちう事を一言云うて下さんせ』

アレクセイは神聖な金曜日に依つて彼女に誓はうとしたのであつたが、併し、彼女はホホと笑を零して、彼を止めた。

『妾にや誓ちう樣なものは入りませんわ』リザは云つた『貴方の約束一つ丈けで充分でござんすわ』

それから後は、彼等は、林の中を一緒に散歩し乍ら、リザが彼に「もう時間でござんすわ」と云ひ出す迄は睦く語合つたのである。

彼等は立分れた、そこで、アレクセイは只一人殘つて、考へて見ると、怎んな風にして、單純な田舍娘が二度の會合に於てかくも實際の勢力を彼に振舞つたかと云ふ事は、不思議に堪へなかつた。彼のアクリーナとの交際は彼に取つて新奇の魅力を示して來た、そこで、變な百姓娘の命令は彼には仲々の難儀に思はれた事は思はれたものゝ、さりとて、自分の約束を守らないと云ふ考は彼の頭にさへ上らなかつた。其の譯はかうである、卽ち、アレクセイは、あの運命の指環に、祕密の文通と、さては、陰欝な、厭世的、悲觀的氣分を示してゐたと云ふ男であるに拘らず、まだ〳〵一面には善良にして、熱烈な青年であつて、清淨な快樂と云ふものを味ひ得る丈けの潔白な心を持つてゐたからであ

る。

若しも私が此の處で自分の希望の一つに從つたとしたならば、屹度、若い人々の會合、募り行くお互の愛戀と、信頼、憧心三昧、或は會話などと悉くその詳細な記述に及んだであらう。然し乍ら、我が讀者諸士の大部分は、私の滿足を私と共に分たれないと云ふ事を信ずるのである。此等の詳細は一般に冗長で、甘つ垂るいものと見えるに相違ない、それ故に、私は、我がアレクセイが未だ二ヶ月と經過しないにはや前後を忘却し果てるまでに戀に陷り、リザも、口にこそは彼程に出さなかつたけれど、情は彌更に深い戀路に踏入つてゐた事を簡單に述べて置いて、それ等を省く事にしよう。双方共に現前の幸福にのみ醉つてゐて、將來の事は殆ど念頭に置かなかつた。

離れ難き鎖鏈と云ふものに就いての考は可也屢々彼等の頭に閃めいた。けれ

ど決して彼等は互にその事を語らなかつた。その理由は明瞭である。アレクセイは如何に、その心は已が可愛いアクリーナに結付けられてゐたとしても、彼と貧しい百姓娘との間に存する距離と云ふものを忘れた事はなかつた。又、リザはリザで、如何なる嫌悪が彼等の父親間に介在してゐたかを知つてゐて、敢て相互の和親に望を懸けてゐなかつたのである。加うるに、彼女の己惚心が、擧句の果てでは、プリルーチンの鍛治屋の娘の足下にツギーロフの地主を眺めようと云ふ暗いロマンティックな希望と云ふものを以て私に鼓舞されてゐたのであつた。

俄に重要な出來事が殆ど彼等相互間の關係をひつくり覆さんとしたのである。

或る朗かな、寒い朝（我がロシャの秋にはそんな朝が多いのである）、イワン・

ペツローウイツチ。ベーレストフは、萬一の場合にと思つて、六匹の獵犬と獵僕とを携へ、五六人の家僕共の小僧には擂鼓(ツレシュチョーウカ)を、持せ、馬に跨つて散策に出たのであつた。これと丁度同じ時に、グリゴーリー・イワノウイツチ・ムロムスキーは、好天氣に誘はれて、自分の短尾の牝馬に鞍附を命じて、それから、自分のイギリス流儀に耕作してある領地の邊にと馬を走らせて行つた。林に近寄つて、彼は自分の隣人を見つけたのであつた、彼は、狐の毛皮で裏を打つた大上衣を着込んで、傲然と馬に跨り、小僧等が灌木の間から追出した兎を待伏してゐる所であつた。若しもグリゴーリー・イワノウイツチが此の出會を前以て見る事が出來たとしたならば、勿論、彼は一方に方角を轉じたには相違ない。所が、彼は全く思掛けなくベーレストフにぶつかつて、俄に、彼からピストルを發射する丈の距離に於て現れたのであつた。何とも致方はなかつたのである。ムロ

ムスキーは、さも教養ある歐羅巴人の如く、自分の敵(かたき)の許に近附いて行き、恭しく彼に挨拶の辭を述べた。ベーレストフは、鎖に繫がれた或る熊が自分の指導者の命令に依つて人々に頭を下げるにも似た殊勝な態度で應答したのであつた。此の瞬間に兎は林から飛出て、野原を駈けた。ベーレストフと獵僕は聲を限り叫立て、犬を放つて、自らも後を追掛けて一目散に馬を駈飛した。未だ一度も狩に出た事のなかつたムロムスキーの馬は喫驚して駈けだした。卓越せる騎者と自稱してゐたムロムスキーは、馬の駈けまくるまゝに打任せて、內心では厭な相手から彼を救つて呉れた機會に滿足を覺えたのであつた。所が、馬は、彼がまだそれまでに目にとめてなかつた谷間まで駈飛んで來て、俄に一方に投じた、そこでムロムスキーは鞍から身を拔かした。凍つた地上にドテンとばかり强(たゝ)か彼が身を打ち附けて、己が短尾の牝馬を呪ひ乍ら、横つたを見れば、

さて、此方は、自分の乘人が居ない事を感ずるが早いか、氣でも附いたかの如に、直樣と立止つたのであつた。イワン・ペツローウイツチは、彼の許へ飛んで行つて、怪我はしなかつたかと尋ねた。その間に獵僕は、手綱を引取つて、罪の馬を引張つて來た。彼は、ムロムスキーが馬に乘るのを助けた、それから、ベーレストフは彼を自分の許へ招待した。ムロムスキーは辭退する事が出來なかつた。なぜなれば、自分の義務と感じたのである。そこで、斯う云ふ風にして、ベーレストフは、兎を犬獵し、又負傷してゐて、殆ど捕虜になつたやうな自分の敵を引連れて、目出度く家に歸つたのであつた。

隣人二人は、朝餉を食し乍ら、可也友誼的に談を交へたのである。ムロムスキーは、ベーレストフに馬車（ブローシユキー）を乞うた、それは、打撲傷の爲めに、彼は馬に乘つて家に達する程の狀態にあらなかつた事を打明けねばならなかつたからである。

ベーレストフは彼を階段の所まで導いて行つた、しかし、ムロムスキーは、その翌日に（アレクセイ・イワノウイツチも一緒に）互に仲善く食事する爲めにプリルーチノに來ると云ふ誓を彼から受けるまでは出發しなかつた。

斯くて、古くより、且つ深く根差してゐた敵意は一短尾牝馬の怯心から將に立消えなんとする形勢を示したのであつた。

リザはグリゴーリー・イワノウイチを迎へに走つて出た。

『まあ、此は如何うなさつたんですの、お父樣？』彼女は驚いて云つた、『何うして貴方お跛引（びつこ）いてゝ？何處に貴方の馬は居ますの？誰の此のヅロージユキーは？』

『さあ、とても察しは出來ないだらうね、My dear』とグリゴーリー・イワノウィッチは彼女に答へた。それから、一切の出來事を語つたのであつた。リ

ザは、あまりの事に、己が耳を信じなかつた。グリゴーリー・イワノウィッチは、彼女が驚いてゐる所へ、明日は彼の所でベーレストフ兩者が食事をするのだと云ふ事を打明けた。

『何を貴方はおつしやつての？』彼女は顔を蒼くして云つた『ベーレストフの親子ですつて！明日私達の宅で食事をするんですつて！否え、お父様、如何なりと御勝手に遊ばせ。妾は如何有つても顔を出しはしませんから』

『何だつて、お前、氣でも狂つたんかい？』父は言葉を反した『ずつと前からお前はそんな羞みやになつてたのかい？それとも、お前は小説の女主人公見たいな遺傳的の憎惡を胸に持つてゐるのか？澤山だ、愚痴なんか零すな……』

『否え、お父様、何んな物が有つたつて、怎んな寶を出されたかつて、妾、決して〳〵ベーレストフの前には出ませんよ』

グリゴーリー・イワノウィッチは肩を搖り、それ以上には彼女と爭はなかつた、何となれば、彼女と反對する事で何も得る事のないのを知つてゐたからである。そこで、自分の特別著しい散策から休息をしに行つて了つた。

リザヴエタ・グリゴーリエヴナは自分の部室に去り、ナスチャを呼寄せた。二人は長い間明日の訪問に就いて評議をしたのであつた。若しもアレクセイが立派に教養のある令嬢に自分のアクリーナを認めたとしたならば、何を考へるだらうか？彼は彼女の暮し方や、行狀や、その怜悧な事に就いて如何なる考を持つであらうか？一面から云へば、リザには斯くも豫期しなかつた所の對面と云ふものが何んな印象を作出したであらうかを非常に見たかつたのである……不圖一の考が彼女に閃いた。彼女はナスチャにそれを傳へた。二人共、拾物の樣にそれを喜び、間違なく實行すると云ふ事に定めたのであつた。

翌日、朝餉の後、グリゴーリー・イワノウイッチは、一體彼女がベーレストフから隱れる積りかと娘に訊いたのであつた。

『お父様』とリザの答へて云ふ様には『妾は、若し貴方が只約束さへお聞入れ下されば、彼の人達を受けますわ。怎んなに妾が彼の人達の前に現れても、何を妾がしても、貴方は決して妾をお叱りにもならなければ、驚や不服の怎んな身振も仕向けないつて云ふ事でしたらね』

『また何とか惡戯だね！』グリゴーリー・イワノウイッチは、笑ひ乍ら、云つた『ウン、可、可。承知だ、好いた事をお仕だよ、黑眼のお轉婆さん』

斯う云ふと共に彼は彼女の額に接吻した、そこで、リザは準備に走つた。

丁度二時に、六頭の馬を附けた自宅製の幌馬車が邸内に入つて來、圓形の濃い綠色の芝地の邊を進んだ。老ベーレストフは、ムロムスキーの二人の役服を

着けた從者に助けられて階段を登つて行つた。彼に續いて息子が馬で到着し、彼と一緒に食堂に入つた、其處では最早食卓が整へられてあつたのである。ムロムスキーは最上の慇懃を儘して自分の隣人を接待し、食事の前に庭園や獸舍を視に行く事を二人に申出て、それから、念を入れて掃いてあり、砂の撒いてある道に依つて案内したのであつた。ベーレストフは、胸の裏では、その無駄骨折や、そんな無益な氣まぐれ事に對しての時間と云ふものを怒んだのであつたが、禮讓と云ふ立場から默つてゐた。彼の息子は經濟一點張の地主の不滿足にも、自慢屋のイギリス崇拜家の歡喜にもてんで關與しなかつた。然し、豫て噂にこそ色々と澤山聞いてゐたお家娘の出て來るのをば今か〳〵とばかり自裂度い心持で待受けてゐたのであつた。それに就いては彼の心は、我々の知る通り、既に無我夢中と對象の上に憧れてゐはしたものゝ、若い美人と云ふもの

は矢張り彼の想像の上に權威を持つたのであつた。

客間へ歸つて、彼等三人は腰を卸した。老人達が若い時代を回想し、自分の勤務の折の逸話などを話してゐる傍ら、アレクセイは、リザの面前で怎んな役割を演じたらよいことかと思案に暮れてゐた。其の擧句、冷靜で、無頓著なのが凡ての場合最も禮儀に適へるものだとの結論に到達した。それで彼は此の主義に從つて行るべく用意してゐた。扉は開いた。彼は、如何なる老練な男たらしの心も必ずやアッとばかりに戰慄しただらうと思はれる程な無頓着と傲慢な態を以て「頭右」とやつた。南無三、其の人はリザにはあらで、ジャクソン老孃、厚化粧に、腹も二つに切れよとばかりに引締めたるが、伏目で室に入込み、チョコッとお辭儀をしたのであつた。さりとは、アレクセイの天晴れ軍隊式の行動も敢無くなつた有樣。再び扉が開いて、此度は本尊のリザであつた時、彼はその失望から

元氣を盛返すことが出來なかつた。

皆は立ちあがつた。彼女の父は今しもお客に紹介しかけたところ、ハタと止めて了つて、忽ち口を緘し、唇を嚙んだ……リザ、彼の淺黑いリザは顏一面、耳迄も眞白に塗りあげ、流石のミス・ジャクソンも及ばぬ濃い眉黛をつけてゐた。彼女自身の髮の毛よりもずつと光澤のある僞髮の縮毛はルイ十四世の假髮も宛らに、脹まされてあつた。袖 a L'imbécile はと云へば、Madame de Pompadour の箍骨で張擴げられたスカートの樣に突張つてゐた。腰はX字形に括られ、又、質屋の暖簾をまだ潛らずにゐた彼女の母の有りつ丈けのダイヤモンドは彼女の指に、首に、耳にと燦爛たる光を放つた。

アレクセイは此の滑稽な、輝くばかりのお孃さんが彼のアクリーナであるとは夢にも悟らなかつた。彼の父が彼女の許へ進んで寄ると、彼も不承不承その

後に隨つた。彼が彼女の白い指に觸れた時には、それが震へた樣に彼に思はれた。その間に、彼は、出來得る限りジャレ媚びた靴を穿いて、意識的に故意差出されてゐた小さい足を認めることが出來た。此は幾らか彼を其の他の彼女の風彩と和解さしたのであつた。白粉や眉黛の事に關しては、それは彼の心の單純さを表白する事になるが、彼は始めてチラと見たことからそれに氣も附かず、又後で怪しみもしなかつた。グリゴーリー・イワノウィッチは自分の約束を思出して、驚の色を見せまいと力めた。併し、彼の娘の惡戯は、殆ど堪らなかつた程面白く彼には思はれた。笑ふやなんどと云ふ段でなかつたのがあのおしやれのイギリス女。彼女は、眉黛や白粉が自分の箪笥から奪去られた事を察知した、そこで、忌々しさからの濃紫の紅色が彼女の顏の人爲的な白色を通して明に顯れ出たのであつた。彼女は若い惡戯娘の上に燃ゆるばかりの眼差を投

げたが、此方は、一切の打明は他の時に差置いて、さもそれには認めぬ顏に僞つてゐた。

彼等は食卓に就いた。アレクセイは周圍の事には無關心な、沈思冥想の役割を演る事を續けた。リザは、身振も飾り媚び、齒の間で小聲で云つてゐる調子は何だか唄でも歌ふやう、それが只佛蘭西語ばかりを遣つてゐるのであつた。父は彼女を打眺め、その目的に至つてはとんと解しなかつたけれど、此は全く非常に面白いと思つてゐた。イギリス女は嚇と腹立つて、押默つてゐた。一人イワン・ペッローウィッチばかりは家に在るが如しであつた。二人前平げ、自分の飲める丈けは飲み、自分で可笑しな事には笑つた、そして段々と馴々しくお喋りをするやら、高らかと打笑ふやらした。

遂に皆は食卓から立ちあがつた。客達は出發した、そこで、グリゴーリー・イ

ワノウィッチは思ふ存分笑ひもし、尋ねても見た。

『何てことをお前は思立つたんだね、彼の人達を愚弄するなんて？』彼はリザに訊いた。

『だが、一體何だか分つてゐるかい？白粉は、實際、お前に大變よく似合つてゐたよ。私は婦人の化粧の祕訣は會得しないが、私がお前だつたら、何時も白粉をつけただらうよ。勿論、多過ぎる樣なつけ方はしない、一寸薄化粧をするだけだ。』

リザは自分の思附の成功から大悅でゐた。彼女は父を抱きしめ、彼の忠告に就いて考へて見ようと約束した、それから、激憤してゐるジャクソン孃をして憐愍の情を起させようと走つて行つた。老孃は扉を開けて、彼女の辯明を聽く事を無理遣に承諾させられたのであつた。リザにはそんな黑い素顏で知らん人

達の前に現れると云ふ事がきまり惡かつた。彼女は敢て乞求めなかつた……彼女は、善良な、可愛いジャクソン孃が自分を許すと云ふ事は確信してゐた……それから、あゝだ、斯うだ、何だ、かんだと云ふ事は。ミス・ジャクソンは、リザが彼女を笑物にさしてやらうと考へたのではなかつたと云ふ事を信認して、氣を靜め、リザに接吻した、そして、和解の徵として、イギリスの白粉罎を彼女に與へた、リザは眞心から感謝の色を浮べてそれを受けたのであつた。

讀者は、リザが翌朝面會の森に現れることを遲滯しなかつた事は推察されることである。

『貴方は昨晩妾達の旦那樣の所へお出になりましたでせう？』早速彼女はアレクセイに云つた『お孃樣は貴方に怎麼に見えましたか？』

アレクセイは彼女には注意を拂はなかつたと答へた。

『殘念でござんすわ』とリザは云つた。
『だつて何うして?』アレクセイは訊いた。
『そりや、妾、皆が云うちよりますが本當ぢやらうか貴方にお訊きして見たいと思うちよりましたので……』
『怎んな事を云つて居ります?』
『本當で御座んせうか知らん、みんなが妾はお嬢さんに似ちよる樣に噂をしちよりますのは?』
『何と云ふ譫言です!彼の女はあんたの前に出したら全然お化ですよ』
『まあ、貴方、其麼な事を云うちやいけませんわ。妾達のお嬢さまは大變色がお白くて、大變風彩がお立派な方で御座んすもの!なんで彼の方と妾が較べものになりませうぞ!』

アレクセイは、彼女が怎んな有りと有ゆる色白の令嬢よりももつと良いと云ふ事を誓言し、尙、彼女を全く安心さす爲に、彼女のお嬢さんの事を非常に滑稽な手附きで述べ始めると、リザは腹の底からさも可笑しさうに呵々と打笑つた。
『けれども』彼女は溜息を吐いて云出した『お嬢さんは、そりや可笑しいのは可笑しう見えましたところで、妾は彼の方の前へ出たら全然讀書の出來ない馬鹿な女でござんすもの』
『なあに!』アレクセイは云つた『そんな事、何が悲しむ必要があるです!だつて、何なら、僕直ぐに讀書を貴女に敎へて上げますよ』
『實際に、ね』リザは云つた『本當に試つて見たら如何で御座いませう?』
『ぢや、お試りなさいよ、ねえ。今でも始めませう』

二人は腰を卸した。アレクセイはポケットから鉛筆と雜記帳を取出した、そこで、アクリーナは驚くべく早くいろはを敎つた。アレクセイは彼女の聰明には然程驚くことは出來なかつた。その翌朝、彼女は書いて見ようと思つた。初は鉛筆が云ふ事を聽かなかつたが、數分も經つたら、可也整頓的に文字を書出すやうになつた。

『こりや實際驚いたですね！』アレクセイが云つた『確に私達の勉强の仕方はランカスターのやり方よりも早く進歩しますよ』

實際、第三日目の朝には、アクリーナは最早「ボヤールの娘ナタリヤ」をアクセントを附點して、綴出した、その事からアレクセイは實際喫驚して居り、そして、紙面全體はその物語から拔萃した格言を以て書き汚されたのであつた。

一週間が經ち、彼等の間には文通が始つた。郵便局は古い樫の木の洞の中に設けられてあつた。ナスチャはこつそり郵便配達の職務を遂げた……

其所へアレクセイは太い手跡で書きつけた手紙を持つて行き、其の處で、普通の青い紙に自分の戀人の鐵釘流の文字を見つけ出した。アクリーナは明に美しい語の云表方に馴れて來た、又彼女の頭は目に見えて發達し、啓發されて來た。

兎角の間に、イワン・ペツローウイツチ・ベーレスートフとグリゴーリー・イワノウイツチ・ムロムスキー間の最近の親和と云ふものは一層確立して來、直ぐに友誼的關係に移つて、次の如き狀態を見るに至つた。ムロムスキーは、イワン・ペツローウイツチの死に因つて彼の全財產はアレクセイ・イワノウイツチの手に移行く事や、さうした場合にはアレクセイ・イワノウイツチは其の縣下での最も富裕な地主の一人となる事や、又リザと結婚をしないと云ふ怎んな理由

もないと云ふ事などを屢々考へた。老ベーレストフはと云へば、自分の側からして、そりや、自分の隣人に幾らか狂人泌みた事（或は、彼の云方に從つてイギリスの頓品漢）を認めはしたものゝ、さりとて、彼に多くの優れた價値、例へば、珍しく機轉の好い事までも認めないと云ふ事はなかつた。グリゴーリー・イワノウィッチは名望家で勢力のあるプロンスキー伯爵の近い親類であつた。伯爵はアレクセイには非常に必要な人たる事が出來た。そして、ムロムスキー（イワン・ペツローウィッチは然う思つた）は、確に、有利な狀態で自分の娘を嫁に出す事を喜んでゐた。親達は、各自自分に取つて、その時まで何時も此の事を考へてゐて、頭到、互に話合つた、そこで、共に相抱き、その事に巧く運びを附ける事を約束し、各自、自分の側からその事に關して面倒を見ることとなつた。ムロムスキーには眼前に困難が横はつてゐた。即ち、自分のベッシ

ーをあの記念すべき晩餐會のあつてより此の方彼女が顏を會した事のないアレクセイと親密に近附をするやうに說服するその事である。打見た所は彼等は何方共互に甚だ好いてゐない樣子であつた。少くとも、アレクセイは最早プリルーチノに戻つては來なかつたし　又リザは、イワン・ペツローウィッチが彼等を訪ねてやると、直に、何時も自分の部室へ逃げて行つたのであつた。

『併し——グリゴーリー・イワノウィッチは考へた——若しもアレクセイが毎日々々宅へやつて來れば、ベッシーは屹度彼に心を寄せるに違ない。此は物事の順序だ。時が何でも旨くやつて呉れるのだ』

イワン・ペツローウィッチは少しも自分の志の成功に就いて心配をしなかつた。その晩、彼は自分の書齋に息子を呼寄せた、パイプを薰し、稍々默つてゐた後口を切つた。

『如何思つてるかね、アリヨーシヤ、ずつと前からもうお前は軍隊へ志願する事を云はんぢやないか?それとも、驃騎兵の正服はもうお前を迷さないんだね?』

『否、お父さん』アレクセイは恭しく答へた『僕は驃騎兵になるのは貴方のお氣に入らん樣に思ひます。貴方に從ふのは僕の義務です。』

『結構だ』イワン・ペツローウイツチは答へた『私はお前を聽分けの良い子だと思ふ。此は私に嬉しい事ぢや。私もお前を强ひる事はしたくないで喃。私は、その、……直ぐには、……文官になる事を逼つてゐる譯ではないがの、ところで、それ迄に私はお前に結婚させようと思つてゐるんだよ』

『それは誰とですか、お父さん?』と驚いたアレクセイは尋ねた。

『リザヴエタ・グリゴーリエヴナ・ムロムスカヤとだ』イワン・ペツローウイツ

チは答へた『彼女なら何處へ出しても立派な花嫁だ、な、さうぢやないか?』

『お父さん、僕はまだ結婚の事は考へてゐないのです』

『お前は考へて居らん、だから私はお前の爲に考へては考へた譯だ』

『それは貴方の御勝手でして、リザ・ムロムスカヤなら僕は全然好かないのです』

『後で好いて來るのだ。堪へて行けば、愛するやうになるんだ』

『僕は自分であの女の幸福を作る器量はないと思ひます』

『彼の子の幸福がお前の悲みとはならない。何だと云ふのか?それでお前は親の意志を尊ぶと云ふのかい?よろしい!』

『何うなりと御勝手に、僕は結婚をしたくもなければ、しもしませんよ』

『結婚しろ、しなけや、己はお前を呪つてやるんだ、そして、財産は——何

は怎うあらうと、いつかなこと！――賣飛して遣ひ果しお前には一文も殘しはしないぞ。三日だけは考へる餘裕を與へてやらう、だが、それ迄は己の前に顏出をしようとしちやならんぞ』

アレクセイは、父が、若し、一旦頭の中で思起した事なら、それは、最早、タラス、スコーチニン（フオン、ウイジンの喜劇「未丁年者」中の人物）の云ふ樣に、釘でも穿り出す事の出來ないと云ふ事を知つてゐた。ところが、アレクセイも親父の子で、彼に爭ひ勝つ事は前者と異らず困難なものであつた。彼は自分の部室へ立去り、父の權限なり、リザヴエタ・グリゴーリエヴナなり彼を乞食にすると云ふ父の嚴しい約束なりに就いて色々考へて見始めた。そして、遂には、アクリーナに就いて考へた。甫めて彼は、彼が彼女に熱情的に戀をしてゐたと云ふ事を知つた。百姓娘と結婚して、自分の努力に依つて生活して行

くと云ふロマンティックな考が彼の頭に起つた。そこで、彼は、自分の決定的な行爲に就いて考へれば考る程、それが賢い考だと悟つたのであつた。暫く以前から森での會合は雨天の爲に止んでゐた。彼は、最も明瞭な手跡と最も狂的な文體を以てアクリーナに手紙を書いて送り、彼女に彼等を脅嚇する所の破滅に就いて打明け、そこで、自分の手を彼女に投出したのである。直ちに彼は手紙を郵便局、洞の中へ持つて行き、それから、自分で非常に打寛いだ樣に床に横つた。

翌日、自分の意圖に確心を持つたアレクセイは、彼等と打明けて事を說明する爲に、朝まだきよりムロムスキーの許へ出發した。彼は、彼の寛大な心を煽起して、自分の側に傾かせようと期待してゐた。

『グリゴーリー・イワノウィッチさんは御在宅ですか？』と彼は　プリルーチ

ノの城の階段の前に自分の馬を停めて、尋ねた。

『お留守でございます』下僕は答へた『グリゴーリー・イワノウイッチ様は朝からお出ましになりました』

『チッ、情ないな！』とアレクセイは思つた。

『ぢや、リザヴェタ・グリゴーリエヴナさん丈けでも被居るですか？』

『諾（はい）、おいでになります』

そこで、アレクセイは、馬から飛下り、從者の手に手綱を渡し、報告なしに入つて行つた。

『一切定る譯だ』彼は客間に近づきつゝ考へた『彼女自身に會つて打明けよう』

彼は這入つて行つた——そして、柱の様に立竦だ！リザ——否、アクリーナ、

愛しい、淺黑のアクリーナは、サラファンにはあらで、雪白の朝着を纏うて、窓前に坐し、彼の手紙を讀んでゐた。彼女は、彼が何時入つて來たか耳にも入れなかつた程心を思に馳せてゐた。アレクセイは歡の叫を禁ずる事が出來なかつた。リザは喫驚して、頭を擡げ、叫聲を立て、飛んで逃げようと思つた。彼は矢庭に彼女を引止めた。

『アクリーナ、アクリーナ！——』

リザは彼から身を遁れようとして跪いた——

『Mais laissez-moi donc, monsieur; mais êtes-vous fou？(妾を放つて置いて下さいまし、貴方、貴方は氣でもお狂ひなさいましたの？)』彼女は身を回轉し乍ら、繰返した。

『アクリーナ！私の親友のアクリーナ！』彼は彼女の手に接吻し乍ら反復し

た。

此光景の證人たるジャクソン嬢は爲す所を知らなかつた。此の瞬間に扉が開き、グリゴーリー・イワノウィッチが入つた。

『アハア！』ムロムスキーは云つた『いや、貴方々はすつかり、はや、事が約束りましてる様ですな……』

讀者諸士は結末を記述する餘計な義務から私を救はれることでのらう。

（了）

大正十年五月十五日印刷
大正十年五月廿七日發行

不許複製

譯者 山縣自然
發行者 後藤誠雄 東京市牛込區横寺町四番地
印刷者 谷口熊之助 東京牛込早稲田鶴巻町三六二

定價 金壹圓四拾錢

發行所 東京市牛込區横寺町四十三番地 聚英閣 振替東京四七八六九番 電話番町四六二番

（早稲田印刷株式會行印行）

K 12

カートライト著 福田久道譯	ジヤン・フランソア・ミレエ	菊版洋製函入	定價金五圓 送料十八錢
アナトール・フランス著 谷崎精二譯	舞姫タイス	菊半裁特製函入	定價金壹圓四十錢 送料八錢
アンナ・シーウエル著 榎本泰二譯	ブラツク・ビユーティー	菊半裁特製函入	定價金壹圓四十錢 送料八錢
マーテルリンク著 二階堂眞壽譯	ジヨアゼル	菊半裁特製函入	定價金壹圓四十錢 送料八錢
マーテルリンク著 小川龍彦譯	婚約	四六版絹表紙函入	定價金貳圓 送料十錢
プーシユキン著 小川龍彦譯	ボリスゴドノフ	四六版特製函入	定價金貳圓貳十錢 送料十錢
プーシユキン著 山縣自然譯	ツブロフスキー	菊半裁特製函入	定價金壹圓四十錢 送料八錢

396
126

終